OpenAI DevDay 2026 の発表と知財業務への影響

調査と考察　2026 年 9 月 30 日現在

GPT-6.1 Sol

本報告は、2026 年 9 月 29 日に開催された OpenAI DevDay 2026 の公式発表と公式技術資料を調査し、企業知財部、特許事務所、知財サービスへの影響を検討するものである。

主な意義は、AI に個別作業を依頼する段階から、継続的な業務を担当させる段階へ進む基盤が整ったことである。競合特許の監視、発明情報の収集、調査結果の更新、部門間の情報共有への影響が大きいと考えられる。ただし、今回の発表だけで FTO や権利化判断を全面的に自律化できると評価するのは早計である。

以下では、確認できた製品・技術の内容に番号引用を付す。知財業務への適用例、将来見通し、導入提案は本報告の考察であり、実証済みの効果とは区別する。

1 発表全体の方向性

OpenAI は 9 月 29 日、サンフランシスコで開催した DevDay 2026 で、ChatGPT、Codex、モデル、API などに関する 20 件以上の主要発表を行った。公式総括では、継続的な責任を担うエージェント、人間と AI の共同作業、外部サービスを組み込める開発基盤を重視している。[1]

主要発表	内容と提供状況	知財業務への意味〔考察〕
dots	常時稼働エージェント。対象市場で展開。組織向けには管理者による有効化や限定試行。[2]	競合監視、調査更新、案件追跡
GPT-6.1 Sol	Work、Codex、API で提供開始。通常の Chat は未提供。[3]	公報読解や対比表作成の適用拡大
Agents API	Computer use と複数エージェント等をアプリに組み込める。[5]	複数システムをまたぐ工程の自動化
Decisions API	有限の選択肢から回答する API。限定プレビュー。[1]	技術分類、案件振分け、一次選別
Plugin extensions	独自画面、ファイル閲覧機能などを搭載。[6]	公報、図面、根拠の一体的な確認
MCP Events	接続先の出来事を契機に処理を開始。[7]	発明届や通知の到着に応じた作業
Space と Team Tasks	共同作業と継続業務の共有基盤。[1,8]	判断根拠の蓄積と部門間連携
Private Intelligence	データ保護を強化。Private Inference は今秋プレビュー予定。[1,9]	未公開発明を扱う導入条件の改善

その他、Ultrafast、Codex のクラウド利用、CLI 刷新、Code Review、Codex Security Cloud、Sites へのプラグイン搭載、共同編集スライド、Slack・Teams 連携、Meetings、共有プロフィール、Sign in with ChatGPT、Pro 500、Marketplace などが発表された。共同編集スライドや GPT-6.1 Sol の Ultrafast は今後の提供予定であり、すべてが即日利用できるわけではない。[1]

2 GPT 6.1 Sol の性能と経済性

GPT-6.1 Sol の標準 API 料金は 100 万トークン当たり入力 2 ドル、出力 10 ドル、キャッシュ入力 0.10 ドルである。標準入出力単価は Astra の 5 分の 1。コンテキストは 105 万トークンで、画像入力、構造化出力、検索、コード実行、MCP、Computer use などに対応する。ただし、長い入力やツール利用には別の料金条件がある。[3,4]

OpenAI は、複雑な PDF を扱う GDP.pdf、多段階業務を扱う AutomationBench などで性能向上を報告した。難しい質問を集めた事実性評価では、低い推論設定における「少なくとも一つ事実誤りを含む回答」の割合が、GPT-6 Sol の 11.4%から 7.7%へ低下した。これは特許業務の誤り率ではない。評価環境と実際の製品では、使用するツールや設定等に差があり得る。[3]

知財部門にとっては、費用や時間の制約から一部の重要文献だけに行っていた詳細分析を、より多くの文献に適用しやすくなることが重要である。請求項と実施例の対応、比較例から読み取れる失敗条件、数値範囲の意味、ファミリー間の記載差異などを、定型的な分析項目として展開できる可能性がある。

ただし、単価の低下が案件全体の費用を 5 分の 1 にするわけではない。再試行、検索、データベース契約、専門家による修正・確認を含む、最終成果物までの総費用で評価する必要がある。

3 dots による継続的な知財業務

dots は GPT-6 Astra を基盤とし、独自のクラウドコンピューターを使って 24 時間継続的に作業できると説明されている。組織内で特定の責任を担う specialist dots も紹介されたが、こちらは企業向けの限定的な試行から始まる。[2]

想定する担当業務	想定する成果物
競合の特許・論文・製品情報の監視	技術テーマごとの変化、重要案件、追加調査事項
製品仕様の変更追跡	既存 FTO 評価への影響と再確認すべき請求項
発明届と研究資料の整理	不足情報、追加質問、先行技術との差異候補
調査・分析報告の更新	前回からの変更点と結論への影響
案件進捗の追跡	未解決事項、確認案、意思決定用資料

上表は実装案である。特許データの取得手段、社内資料へのアクセス、更新頻度、承認条件を設定して初めて実務として成立する。

dots の自発的なバックグラウンド調査は、接続済みアプリの読み取り専用ツールを使う設計である。外部送信や変更操作にはルールと自動レビューが関わり、重要な成果物は利用者による確認が必要とされる。「常時稼働」は、すべての操作を無条件に実行するという意味ではない。[2]

4 知財業務ごとの影響

以下は、確認した機能を前提とする適用可能性の評価である。各業務での精度や工数削減率を保証するものではない。

業務	期待される変化	検証点
特許調査と SDI	検索、一次選別、詳細分析、報告更新を連続して運用	収録範囲、検索漏れ、再現率、除外理由
FTO	仕様変更や権利変動に応じて請求項対比を更新	対象国、存続状況、補正後の請求項、構成要件解釈
発明発掘と創出	会議・実験・設計変更から発明候補を収集	技術的成立性、先行技術との差異、人間の寄与の記録
明細書作成	発明情報の整理と記載不足・用語不整合の検出	元資料との一致、未検証の効果や実施例の混入
拒絶理由対応	引用文献、出願記載、審査経過から対応案を作成	引用箇所、補正根拠、事業目的との整合
IP ランドスケープ	新情報を取り込み、仮説と分析を継続更新	母集団、分類基準、事実と推測、判断変更の根拠
知財管理	発明届の振分け、定型資料、進捗照会を自動化	正式記録との一致、権限、誤更新の防止

特に FTO では、「一度調査して報告する」から「製品と権利の変化を追い、評価を更新する」への移行が重要である。ただし、今回確認した公式資料には、これらの新機能について特許調査の再現率、請求項解釈の正確性、FTO 判断の精度を直接示す検証は見当たらなかった。一般業務のベンチマークから知財業務の精度を推定するには限界がある。

5 イベントを起点とした業務設計

MCP Events は、外部アプリのイベントを受けて処理を開始する仕組みである。接続先がイベント通知を実装する必要があり、どの特許データベースにも自動的に対応するものではない。公式技術資料は、重複通知や順序の入れ替わりを想定した実装も求めている。[7]

知財では、発明届の登録に応じた不足項目の確認、拒絶理由通知の到着に応じた引用文献・補正候補の整理、製品仕様の改訂に応じた FTO 対比表の影響箇所の抽出が考えられる。開始条件、使用する情報、完成条件、停止条件、承認者を定めることが、業務品質を左右する。

6 共同作業と機密管理

Team Tasks は、チーム用サービスアカウントと設定された接続先を使ってクラウドで動作する。作成者の個人メモリーや過去のチャットは引き継がない。また、チーム参加者は過去の実行結果・生成ファイルを閲覧でき、個々のタスクや実行ごとに別のアクセス制限を設定できないと説明されている。[8]

共同研究、他社との契約案件、訴訟案件などでは、情報の共有範囲に合わせたチーム設計が必要である。一方、調査根拠と判断の変更履歴を共有できれば、担当者ごとのチャットに知見が分散する問題の改善が期待できる。

Private Intelligence の一部である ZDR with Private Safety Processing は、OpenAI が顧客のプロンプトや応答を保持せずに自動安全レビューを行う仕組みだが、承認・設定条件がある。API の保持条件は機能ごとに異なり、外部 MCP サービスに送信した情報には、そのサービスの保持方針が適用される。[9,10]

未公開発明については、学習利用、保存期間、人によるアクセス、外部送信、共有範囲をそれぞれ確認する必要がある。「学習に使われない」という条件だけで機密管理の評価は完了しない。API 向けの条件を、dots や ChatGPT 全体に一律に当てはめることも避けるべきである。

7 中期的な影響の考察

企業知財部

文献の読み込みや資料作成に加え、AI が担当する工程の設計と評価が重要になる。特に少人数部門では、監視・一次整理を継続運用できれば、事業部との対話、重要案件の深読み、出願・秘匿・権利活用の判断に時間を配分しやすくなる。

特許事務所

草案作成の速度に加え、研究開発への質問、権利範囲の設計、補正の選択、事業との整合を説明する力が求められる。AI 出力を確認・修正する費用も含め、提供価値を明確にする必要がある。

知財サービス企業

ChatGPT 内に独自画面や閲覧機能を組み込めることが、新しい提供経路になり得る。公式資料はサイドバーからの独自アプリ起動や、会話と並行して使う画面などを説明している。[6] 汎用モデルによる要約に加え、特許データの品質、法的状態、出典追跡、専門分類、業務との接続が差別化要因になると考えられる。

8 導入の優先順位と評価方法

最初の対象には、公開情報を使う競合監視や新着特許の一次整理が適している。その後、検証結果に応じて社内資料との比較、対比表の更新、権利化支援へ広げる進め方が現実的である。

段階	対象例	評価する指標

段階	対象例	評価する指標
1	公開特許の監視と一次整理	重要文献の見落とし、誤分類、出典の正確性
2	社内技術との比較と発明届整理	根拠の一致、不足情報の検出、機密管理
3	FTO と拒絶理由対応の案作成	専門家の修正量、重大誤り、再現性
4	継続運用	更新漏れ、承認漏れ、総工数と総費用

既存業務と同じ案件を使い、AI の作業時間と人間の確認時間を合算して、品質と費用を比較することを提案する。重大な見落としや根拠誤りを個別に評価し、平均的な時短だけで採否を決めないことが重要である。

今回の発表から最も強く読み取れるのは、知財業務の継続的な収集・整理・更新を AI に担当させる可能性である。その成果を経営や権利化の判断につなげるためには、正確なデータ、追跡可能な根拠、専門家による判断を組み込んだ業務設計が引き続き中心になる。

参考文献

すべて OpenAI の公式発表・公式技術資料。確認日はいずれも 2026 年 9 月 30 日。ウェブ資料の提供条件や仕様は更新される可能性がある。公開日が明示された発表記事には日付を記載し、技術資料には確認日を適用する。

[1] OpenAI. DevDay 2026 Recap. 2026 年 9 月 29 日.

https://openai.com/index/devday-2026-recap/
参照事項：主要発表と提供予定の総括。確認日：2026 年 9 月 30 日。

[2] OpenAI. Introducing dots. 2026 年 9 月 29 日.

https://openai.com/index/introducing-dots/
参照事項：常時稼働、権限、承認、組織向け試行。確認日：2026 年 9 月 30 日。

[3] OpenAI. Introducing GPT-6.1 Sol. 2026 年 9 月 29 日の発表.

https://openai.com/index/introducing-gpt-6-1-sol/
参照事項：性能評価、料金、Work と Codex への提供。確認日：2026 年 9 月 30 日。

[4] OpenAI Developers. GPT-6.1 Sol Model. 技術資料.

https://developers.openai.com/api/docs/models/gpt-6.1-sol
参照事項：モデル仕様、料金条件、対応ツール。確認日：2026 年 9 月 30 日。

[5] OpenAI Developers. Computer use — Agents API. 技術資料.

https://developers.openai.com/api/docs/guides/agents-api/tools/computer-use
参照事項：Agents API によるソフトウェア操作と承認処理。確認日：2026 年 9 月 30 日。

[6] OpenAI Developers. Plugin Extensions. 技術資料.

https://developers.openai.com/plugins/build/extensions
参照事項：独自画面と閲覧機能の拡張。確認日：2026 年 9 月 30 日。

[7] OpenAI Developers. MCP Events. 技術資料.

https://developers.openai.com/plugins/build/mcp-events
参照事項：イベント購読と通知、重複処理等の実装条件。確認日：2026 年 9 月 30 日。

[8] ChatGPT Learn. Set up and manage teams and Team Tasks. 公式運用資料.

https://learn.chatgpt.com/docs/enterprise/teams
参照事項：チーム、共有接続、タスク、閲覧権限。確認日：2026 年 9 月 30 日。

[9] OpenAI Developers. ZDR with Private Safety Processing. 技術資料.

https://developers.openai.com/api/docs/guides/private-safety-processing
参照事項：保持を制限する安全レビューと設定条件。確認日：2026 年 9 月 30 日。

[10] OpenAI Developers. Data controls in the OpenAI platform. 技術資料.

https://developers.openai.com/api/docs/guides/your-data
参照事項：API ごとの保持条件と第三者サービスへの送信。確認日：2026 年 9 月 30 日。